

この一年、そして新たな年へ

上廣榮治

師走の声を聞くと、誰しも「この一年」を振り返り、こんなことがあった、あんなこともあったと、二度と帰らぬ時間に織りなされたあれこれに、あいせき哀惜の念を募らせませす。

まず思い出されるのは、先に逝ってしまった親しい人々の面影おもかげです。歳を重ねるにつれ、古い友人知人との別れも多くなりました。彼らのことを思うたびに、残された者として、生かされている生をいかに生きるべきかを、あらためて考えさせられます。

ところが、その他のことでは何があったのだろうかと考ええると、ひどく曖昧あいまい模糊もことして、その忘却ぶりに我ながら驚いてしまうのです。たとえば、今年の一月はどうであったかといえ、元朝式や年賀式など、私自身が直接かかわった我が会の行事を除けば、さて世間では何があったのかと考えても、茫漠ぼぼくとしたままなのです。

これではならじと、新聞の月録を繰くってみると、一月一日には奈良県で「平城遷都一三〇〇年祭」が開幕してしました。奈良に都が移ってから千三百年、一世代二十五代としておよそ五十世代、この長い歲月の間、人々は何を考え、何を希望し、何に向かって歩んできたのでしょうか。

そして一月十二日には、ハイチの首都ポルトープランス付近でマグニチュード七・〇の地震が発生し、死者行方不明者が二十万人に及ぶという大惨事になりました。この地震の被害の続報がまだ続いていた翌月の二十七日に、今度は南米チリの商工業都市コンセプシオンをマグニチュード八・八の巨大地震が襲い、津波などで約八百人の死者がでました。

この二つの地震の規模に比べると、死者の数の際立った差は印象的でした。内戦やクーデターを繰り返してきたハイチと、南米で最も汚職が少なく透明度も高い法治国家といわれるチリ。社会の質の差がもたらすものの大きさに、驚かされたものでした。

チリの巨大地震が起きたのは、バンクーバー冬季五輪の期間中であつたことも、まったく忘れていました。オリンピックで、かろうじて覚えていたことといえば、浅田真央選手が銀メダルをとつたことぐらいです。浅田選手といえば、今でもよく覚えているのは、ある新聞の小さな韓国レポートのことです。韓国駐在の記者がことあるごとに、キム・ヨナと浅田真央のどちらを美人だと思ふかと聞かれるという記事です。意外なことに、韓国人の男性の多くが浅田選手のおとなしそうなところを気に入っていて、キム選手の気が強そうなどころをマイナスだと思つているのだそうです。

愚にもつかない記事なのに、なぜか記憶に残つていたのは、私が日頃から、人は何に惹かれるのか、何を美しいと思うかに関心を持っていたからだと思ひます。それは私にかぎつたことではないでしょう。人は誰でも、人間の暗い面ではなく、明るく美しい面、人間の強さや勇気の表われに、より強い興味や関心を持つに違いないのです。

たとえば、十月十六日に中国河南省中部の炭鉱で起きた事故で十一人（一説では三十七人）が坑内に閉じ込められ、犠牲になつたニュースはほんの小さな扱いであつたのに対して、その二日前に、三十三人全員が

無事救出されたチリのサンホセ鉱山の救出劇は、連日大々的に報道され、世界中の耳目を集めました。

極限状況の中で、自分たちより先に逃げ出すことのできた人たちが全員無事だったことを喜ぶ俠気、地下七〇メートルの狭い空間で耐え抜いた知恵と力、彼らを助け出すべく行なわれた真摯な努力、家族たちの励まし、世界各国からの援助など、人間の「生への意志」が、誰の胸にも明るく強く響いたのです。

また、鈴木章、根岸英一両氏のノーベル化学賞も日本人の心を明るくしてくれたニュースでした。

その一方で、人の生命の軽さやはかなさを思わせる事件も、数多くあった年でした。韓国の哨戒艦の沈没による四十六名の死。モスクワの地下鉄連続自爆テロによる三十九人の死。タイのバンコクで前首相支持派のデモに対する鎮圧で、邦人カメラマンを含む二十名の死。政府専用機の墜落で、ポーランドの大統領をはじめ政府使節団など九十六名の死。そして、紛争や内戦やテロによる数えきれない死……。

大規模な自然破壊や自然災害も多発しました。メキシコ湾では石油掘削施設が爆発して、大量の原油が海に流失し、海洋汚染が広がりました。アイスランド南部では火山が噴火して、火山灰がヨーロッパの空を覆って、各国の空港が閉鎖される事態になりました。

しかし、これらのテロや事故や災害などの暗い話は、ほとんど忘れかけていて、言われてみれば、そんなこともあったと思出すことのほうが多いように思われます。私たちは個人の力ではどうしようもない悲劇については、やりきれない思いとともに、そこから目を背け、無意識のうちに、あるいは意識的に、忘れてしまおうとしがちなのです。

では、それでよいのかといえは、よからうはずがありません。どんな災難も明日は我が身にならない保証はないのです。私たち個人の力ではどうしようもないと思われることでも、一人ひとりの力を結集することで、事態を好転できることもあるのです。たとえ天変地異であつても、備えあれば憂いも少ないというもの

です。大地震にさいしてのハイチとチリ、釧山事故における中国とチリ、その明暗を分けたのも、多分に人為的なものでした。

それでも、完全な備えというものはありません。私たちがすべきことは、「今の自分たちにできる」備えを万全にすることです。そして直面してしまった事態に対しては、勇気を持って精一杯前向きに対応し、真摯に努力するだけです。

やりきれないニュースといえは、増加しつづける児童や幼児に対する虐待事件です。なかでも衝撃的だったのは、実の母親が三歳と一歳の幼児二人を冷房も食料もない部屋に閉じ込め、死に至らしめた事件でした。猛暑にゆだる部屋はテープで目張りまでされていたというのです。

この事件に対しては、同じ年頃の子を持つ母親たちから、多くの投書がマスコミに寄せられました。そのほとんどが虐待に対する憤りと、二人の子どもの苦しさや絶望を思うと、涙が止まらないというものでした。かわいそうで心がふさいでしかたがないと、心身の不調を訴える人までいました。

確かにそれは、子を持つ母親でなくても、深刻なショックを受ける事件です。しかし、あえて申し上げなくてはなりません。それはもはや取り返しのつかない過去のことなのです。二人の子どもにいかに同情し、その死をいかに悼もうとも、二人の生命を取り戻すことはできないのです。私たちにできることは、こうした事件が起らない倫理的な社会の実現を一日でも早めることしかありません。

私たちはどんな悲惨も不幸も、それが過ぎてしまったことであるかぎり、そこに心を残し、いつまでも止まってはならないのです。私たちにできることは、前を向いて、より善い明日を拓く努力をするだけなのです。その努力の内にこそ、私たちの仕合わせはあるのです。だからこそ、年の暮れには、来年こそはと希望と決意をかき立てられるのです。